

組合創立120周年記念連載③ 特売会の歴史

副理事長 森林慎介

きっかけ

昭和26年(1946年)1月、三井農林が本所に市売市場を開設し、さらに4月に杉並、7月には深川でも市売を始めた。3月から5月にかけて市売を始める問屋が現れ、6月には市売の本家ともいべき大阪の大手市売問屋の久我商店が東京に進出し、深川で市売を始めて木場内の問屋に衝撃を与えた。一方、同じ6月に山手の新東京木材商業組合が、組合員を対象に中目黒の木材置場で市売を開始した。8月には新東京木材市場が営業を始めた。この後も都内で4市場が相次いで開設し、この年、都内で実に10市場が出現した。いずれも相応の実績をあげ、木場問屋の商圈を揺さぶり始めた。

対抗策

当組合では、昭和26年(1946年)6月に市売対策研究委員会を立ち上げ、数回に亘る研究・討議・議論を重ねた。小売商組合の東京中央木材協同組合(現東京材木商協同組合・以下材商)から当組合に対し入札会を行うよう提案してきた。10月には本所地区の問屋を招き特売研究会が開かれ、11月には材商と入札問題について協議を行った。12月に常務理事会で材商との特売契約事項の基本方針が決定された。

こうして第一回特売会は、昭和27年(1947年)1月23日に新年懇親特売会と銘打って行われた。初年度の売上は、1億5,874万円に達した。翌年は倍増の3億2,935万円、昭和35年(1960年)には10億5,645万円と初めて10億円の大台に乗せ、昭和39年(1964年)には22億3,990万円と20億円の大台を突破した。バブル最盛期の平成2年(1990)年には、26億728万円という特売会史上最高の売上を記録した。

現在も特売会は継続実施されており、令和8年で74年の歴史を有している。昨今の売上は、9億円前後で推移している。
(本文は江戸東京木材史より抜粋)



平成17年7月29日 ナイター展示特売会



平成18年7月27日 ナイター展示特売会
終了後の懇親会(吉条理事長挨拶。向かって左が材商、右が問屋の役員)

(江戸東京木材史P1394)